

2012 年度 全国大学史資料協議会報告

豊橋研究支援課 田辺 勝巳

I 全国大学史資料協議会 2012 年度総会・全国研究会報告 (2012/10/10～12 同支社大学今出川キャンパス)

学校教育法施行規則等の改正により、平成 23 年度 4 月より大学の教育情報の公表が義務づけられた。その省令改正の狙いの一つは、大学が社会的機関として最低限の責任を果たすことであり、もう一つは、大学が情報の公開を通して教育力向上や改革に役立てることである。大学には教育活動、研究活動、社会貢献(公開すること)のほか、国際協力、産官学との協力、地域社会・産業との連携が求められている。学生への教育、研究活動に加えて地域との関わりについても期待されている。大学における地域との関わり方の歴史的経緯、歴史を通じての地域連携がどのようにできるか、を議論したいとして開催された。

また、国際協力、産官学との協力、地域社会・産業との連携、教育基本法も変わった。公文書管理法の改正では、行政文書の保存が義務づけられ国立大学では対応をせざるを得ないこととなっている。今後、私立大学にも対応が求められること、大学におけるアーカイブスでの社会貢献対応を期待されている現状のなか、2日間の総会、研究会に参加でき、大きな刺激と今後の参考になった。また、人的交流もでき、首都圏の大学関係者や、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の研究に協力いただき、慶応大学福澤諭吉記念センター関係者との交流もでき、大変有意義であった。

講演のなかで、同志社大学と明治大学の事例が大変参考になったことから、下記にまとめる。なお、今回会場校であった同志社大学でのキャンパスツアーは、在学生が対応してくれ、わかりやすい説明と歴史ある大学だからこそその「複数の有形文化財建物



と、現代建物との調和がとれたキャンパス」の魅力が垣間見ることができた。本学でも、大学記念館説明ほかキャンパスツアーにおいて、在学生に対応してもらい、本学の良さ、学生の質を伝えることと、本学への帰属意識をもった学生を増やす試みが必要であることを再認識した。

(1) 福島と同志社－震災復興をめぐる

同志社大学 同志社社史資料センター
社史資料調査員 小枝 弘和 氏

本研究テーマ「大学アーカイブスと社会貢献」の一事例として、「福島と同志社－震災復興をめぐる」の学校法人同志社取り組みが紹介された。

2011 年 6 月、NHKは 2013 年大河ドラマ「八重の桜」の制作発表をした。その目的は東日本大震災からの復興を目指す東北・福島県にエールを送ることである。同志社はNHKの姿勢に賛同し、NHK並びに福島県への協力を HP 上で公表した。製作発表から 1 年半を経た今、NHKならびに福島県への継続的

な協力を行っている。協力理由は、同志社大学には600点の新島家の写真があること、大学PRの最大のチャンスであること、NHKの「東日本へエールを送りたい」との考えに賛同できたこと、から支援を決定した。そこで、福島県に協力しながら、どう同志社とつなげていくかの検討に入った。

まず、展示を中心に「話題性づくり」を検討した。「大学アーカイブスと社会貢献」という考えのもと「震災復興とのかかわり」をもつこととした。新島襄と共に同志社の設立者の一人である山本覚馬と、新島襄の妻新島八重は兄妹であり会津藩出身である。同志社にとっては恩人の故郷である。八重は、横浜市伊勢佐木町火災時に35円の寄付をし、神奈川県知事から感謝状を頂くなど、被災地域への貢献をされている。被災地貢献と出身地域が会津であることを考えると協力は当然である。八重は、「故郷が大好きで故郷に対する思いが強く、協力行動をしたであろう」との考えは想像できることから、同志社として「私たちが何かしていこう」との結論に至る。

その背景に、「かえらざることとしれどもいくたびか、おおいいたしてぬる袖かな」「御慶事をききて、いくとせかみねにかかれるむら雲の、はれて嬉しきひかりをぞ見る」「千代ふとも、いろもかわらぬ若松の、木のしたかげに、遊びむれつる」との故郷を想う八重の歌が書かれた書が保存されている。

震災以前からの学問的關係と交流があり、2009秋企画展「新島八重の生涯—進取と矜持—」開催にあたり、会津若松市、福島県立博物館、会津武家屋敷より協力を得た。

どう付加価値をつけて展開していくか、を常に意識して企画・立案および行動をしている。

①学校法人同志社における協力体制

- 八重桜プロジェクト：広報課がまとめ役となった報告組織
- 「新島八重と同志社」サイト公開：広報課が開設した八重に関する情報を盛り込んだサイトで、八重に関する新情報発信と年表やコラムなど八重の生涯を解説
- 同志社社史資料センター：写真提供（学外から写真を貸してほしいという依頼たくさん）が主なものであるが広報課と社史資料センターは密にタイアップ

- 画像借用、レファレンスの対応、外部雑誌の記事・原稿の確認
- 『新島八重子回想録』の復刻
- 八重書簡および八重宛書簡翻刻および出版（予定）
- 新島旧邸公開時間の拡大

②福島に対する具体的な協力例

●社史資料調査員の派遣

「がんばろうふくしま！大交流フェア」に参加：2012年3月23日（東京国際フォーラム）「福島まごころフェスタ」2012年8月4～5日（東京国際フォーラム）



* NHK HPより

- 「福島の地に流れる矜持と覚悟 新島八重と戊辰（ぼしん）戦争」展への協力
 - 二本松市歴史資料館に、100点以上の八重、覚馬、襄に関する資料と、期間中6回のギャラリートーク開催のために出張、同志社女子大のゼミで学生作成の八重の洋服を再現
- 若松城天守閣郷土博物館への資料貸出（洋食器類など）
 - 同館で開催する「京都守護職拜命150年と新島八重」展に約20点貸出（洋食器類など）
- 福島県立博物館への資料貸出
 - 常設展に約10点貸出：新島襄との二人の夫婦の生活を再現
- 福島民報社への写真提供
 - 写真パネル展示に約20点貸出
- 会津武家屋敷へ写真提供
 - 写真パネル展示に3点貸出
- 出版社などへの写真提供

③NHK への協力

- 2013年NHK大河ドラマ特別展「八重の桜」協力
NHK プロモーションが中心となってドラマに合わせて企画
 - ・八重・襄関連資料の前面的な協力(100点程度)
 - ・特別展企画にあたり社史資料調査員派遣(2013年「八重の桜」企画委員)
 - ・学術的な監修
 - ・図録作成に関する全面協力
- その他ドラマに関する協力
 - ・新島旧邸の取材など

④福島県内からの協力

- 同志社での企画展開催(企画中)
仮題: 2013年春学期Neesima Room企画展「八重と会津—八重を育てた故郷—」
主催: (調整中)学校法人同志社、福島県、会津若松市
協力: 若松城天守閣郷土博物館、福島県立博物館、ほか
資料提供: 若松城天守閣郷土博物館所蔵資料、福島県立博物館所蔵資料
期間: 2013年4月1日~6月末日(展示代えあり)

まとめ

福島県内への協力として、人とモノを提供し、京都では募金を募ることで震災復興への貢献を果たそうと考えているが、これらは継続的な貢献とはならない。また、大学の最大の構成要素であり、ブランドである学生を中心とした取り組みにまで至っていない。震災復興への取り組みは同志社の歴史から考えても当然取り組むべき課題であるが、同時に計り知れないほどの価値のある広告ともなる。この2点を踏まえたうえで、持続可能な貢献を今後模索していく必要がある。

震災復興への協力は「大学アーカイブスの社会貢献」の一事例であり、福島県との仕事から見てきた「大学アーカイブスの社会貢献」のひとつのモデルといえる。福島へ仕事をもちかけ、何度も出張することで好意をもってもらえ、卒業生は喜んでくれて、自分たちは立ち位置を考えることができ、母校をよく言われて喜ばしいとのコメントがあるように、卒業生・社会

から好感をもたれる機会になった。

「大学アーカイブスと社会貢献」という意味では、本報告は極めて稀なケースである。そもそも社会をいかに定義するか、また極めて閉鎖された空間である大学の歴史がひらかれた社会に対し、そのような価値を持ちうるのか、新たに考えねばならないであろう。従来から実施されている生涯学習や高校への教員派遣などは大学の社会貢献の一部である。きわめて狭隘な歴史を扱う大学アーカイブスが社会に対してどのような価値を発信できるかが、大学が社会と共有してきた歴史を顧みることによって模索していくことが大前提であろう。

質問Q

大学の資料をつかって、他のかたちでの取り組みの可能性はどんなことがありますか？

回答A 来年は資料をNHKに貸す。同志社女子大学に形にしてもらったものもあり。福島県と学校法人同志社との関係をつくっていききたい。福島県は同志社をつかって京都に関係をつくることを模索しており、福島県には郡山女子大もあることから、協定を結んで何かやっていきたい。来年も展示を考えている。いっぽう学内では、大学の歴史を学べる科目を配置しており、その履修者がキャンパスツアーガイドになっている。学生に対しては、足元の歴史に関心をもってもらい、「いいものが大学の歴史にあるよね」と認識させるようにしている。

質問Q

とりくみがメディアとの連携にみえるが、社会貢献の可視化を考えたいうえで、関係性について、お話しいただきたい。

回答A 一般論として、アーカイブスの発信にはメディアが大切である。読売、朝日新聞に掲載されると、200件の話がある。

(2) 大学アーカイブス構築資源の有用性を どうアピールし社会連携するか？

—明治大学史資料センターでの経験を踏まえて—

明治大学 史資料センター

村松 玄太 氏

●大学アーカイブスの3要素

1. 構築／収集、移管、保存管理が一番の仕事
2. 公開／目録編成、各種レファレンスサービス(問い合わせに答える)
3. 広報／有用性をアピール(資源は何のために役立つかを広く知らせる)

●広報／有用性をアピールする理由

【前提】

社会一般はもとより、学内においてさえも、大学アーカイブスとその資源についての理解が深いとは到底言えない。

これらの有用性を説明することをおして、内外に意義を認識してもらわない限り、今後大学アーカイブスは存立し得ないのではないのか。

【対応】

1. 具体的な役立ち方の例示

具体的な事例に基づいて、大学アーカイブスとその資源がどのように役立つかを示す。

※[証拠 evidence] [説明責任 accountability]
[社会に開かれた大学] といったキーワードを念頭におく。

2. 担当者による有用な資源利用の実践(展示・出版)

資源がどう役立つか、またどう活用すればいいのか、部外者は多くを知らない。あらゆる機会を利用し、担当者自ら資料を活用して成果を提示し、その有用性を知らせる。(実際多くのアーカイブスで行われている)

●資源活用の具体例①

明治大学創立 130 周年記念事業(2011 年)コンセプト:「世界へ—『個』を強め、世界をつなぎ、未来へ—」

ア) 資源の有用性アピールの場としての周年事業

※担当者自らが<資源>を活用し広くアピールする絶好の機会。2009 年から準備開始(周年事業事務局兼務)

イ) 目的に合致した<資源>の活用について

- a) 編纂(大学史関係 6冊+外国語版 4冊、DVD1 枚)
- b) 展示(5 会場同時開催)
内容／基本理念や方針、歴史・機関の成立、国際化推進の課題への取り組み、創立者(著名交友)紹介
- c) イベント(4つ) <資源>を活用したシンポジウム・フェスティバル
一過性のものとして思われがちだが、注目を高める意味では重要

ウ) 理念・教育研究方針の周知に資する<資源>活用

記念展示「明治大学<個>を強くする 130 年—現在(いま)と昔」

※工夫点／通常の編纂的な歴史展示と構成を変える

【通常の編年展示例】

創立者>創定期>改革期>大学認可>戦時期>大学紛争>現在

【今回の展示】

教育研究組織のいま(学部・大学院)≫創立者>大学の歴史>著名卒業生

※現在を展示したうえで、歴史等のトピックスを見せる(内部質保証の組立・不特定多数の鑑賞)

エ) 地域連携+新たな課題推進に資する<資源>活用

「**神田・神保町中華街**」プロジェクト(2011.10.7~19)

○<神田・神保町中華街>とは？

明治末期に神田神保町界隈に形成されたアジア留学生を対象とした中華街で、ピーク時 7,000 人の留学生がいた。貿易街から発展した横浜・神戸・長崎とは違い、アカデミックな街。

「Ⅰ.留学生が形成した第四の中華街」「Ⅱ.老舗中華店が点在」「Ⅲ.明治大学は留学生向け教育機関に設置し、その形成に関わった」

○＜資源＞活用の提案に至った動機とは？

明治大学における国際化推進を歴史的に検証し、内外にアピールした。明治大学は、当時から留学生向けに国際化の取り組みをしており、明治大学の国際化を示すという一挙兩得をねらった。

130周年のコンセプトに「国際化推進」が含まれていたため、大学アーカイブスの【資源】を活用して、明治大学の国際化の取り組みの原点の掘り起しを行い、あわせて留学生の受け皿であった地域と大学の連携を図ることを企画した。

○プロジェクトチラシ

地域との連携を念頭に、本の街「神保町」を元気にする会との共催、千代田区・千代田区観光協会の後援を得る。

○靖国通り京劇・獅子舞チャリティーパレード

京劇は、役者である法学部魯大鳴先生からゼミ生に依頼し、学生団体、留学生の連合団体にも広がりができた。獅子舞は、東京中華学校にお借りし、獅子舞はパレードの最終の大学において、獅子舞の竜の口から「明治大学創立130周年」の垂れ幕を出すパフォーマンスをしてもらった。パレードには中国、台湾の学生団体を入れ、500名が参加。イベントの終了後復興募金活動を行った。

○「味の祭典」スタンプラリー

明治期に誕生し留学生にごはんをだしていた中華店9店舗に協力をお願いした。孫文、周恩来の行き着けの店も含まれる。3店舗来店すれば、クリアファイルをプレゼントする企画をする。お店には、復刻メニューを中心に提供してもらった。

○明治大学の国際交流 130年(2011.10.7～11.19)

明治大学アカデミーコモン博物館特別展示室)

明治大学の国際交流の現在の取り組みを紹介したうえで、明治期から始まる大学の国際交流の歩みを紹介(歴史的根拠を示す)。あわせて、神田・神保町中華街も紹介する。

○学生制作による情報誌「KANDA～神田に来チャイナ～」

学生参加を促す。

○ブックフェア「明治大学の書き手たち」

(2011.10.8～11.6 三省堂書店神保町本店)

神保町が本拠の三省堂書店(創立年が明治大学

と同じ1881年)にて大学史資料センターおよび図書館で把握する明治大学関係の書き手のブックフェアを開催した。学生によるポップディスプレイをして、在学生とのコラボ企画を展開する。大きな垂れ幕をつくり、三省堂の看板に垂れ幕をつけた。広告費として対応する。

○イベントへのマスメディアの反響と効能

「東京人」2011.11月号…特集「チャイナタウン神田神保町」

*特集はしてくれたが、広告費をだした。

「散歩の達人」2011.11月号

「噂の!東京マガジン」(TBS)2012.6.10

「ニュースエブリイ」(日本テレビ)2012.8

「尖閣問題を取り上げるシンガポールTVニュース」2012.9

*留学生から「日本に来てなかよくやろよ!」というメッセージを世界にアピール。

【効果/効能】

- ・明治大学の留学生教育について紹介される。
- ・大学と神保町境界の写真資源の問い合わせが増える。
- ・町内会地元企業との交流、パイプができた。
- ・獅子舞協力学校の東京中華学校が推薦入学の検討校となった。
- ・留学生が掲載されることにより、国際交流が広まる。

○『明治大学小史(人物編)』(学文社2011年)発行 没後卒業生118名と存命者1名(村山富一元首相)を紹介する。

創立期の人々、初期卒業生・大学行政関係者、アカデミズム、法曹・文化、スポーツ、アジア留学生から選出(=著名卒業生の資源活用)





○＜資源＞著名卒業生の資源活用デメリット

- ・卒業生資料を含む妥当性
- ・受入基準の難しさ＝「この人をクローズアップしてよいのか？」
- ・いわゆる「有名人主義」＝「有名だからといってその人だけを拡大していいのか？」

○＜資源＞著名卒業生の資源活用メリット

- ・大学の理念や教育方針を、大学の排出した人物の高い知名度を活かして内外に周知することが可能＝「こんな立派な卒業生がいるのか！」
- ・学内関係者、卒業生のモラル向上
- ・資料を所蔵する大学アーカイブスへの注目

○三木武夫展(2011.10.16～12.22)

- 「無信不立—いま、三木武夫を問い直すシンポジウム」開催(2011.11. 4)

海部俊樹元首相、村山富一元首相、岩見陸夫氏等出席。

○阿久悠記念館 常設展(2011.10.28～、アカデミーコモン地下1階)

10月開館後、25,000人來館

- コンサート開催「阿久悠歌謡祭—愛よ急げ」(2011.10.28)

阿久悠作品をアーティストに歌唱してもらう
南こうせつほか 2,000人集まる。

学内のアーカイブスの認知度はあがったのではないか。

○＜資源＞活用の成果

a 学内での認知度の上昇

- ・挙証資料の保管庫としての大学アーカイブスの意義を周知
- ・モラルの向上

b 大学のブランディング向上

c 社会連携の促進(地域・企業)

まとめ

1. 有効性のアピールの必要性

大学アーカイブスに対する社会的な認知の低さを踏まえて、担当者が積極的にアピールしなければならない。対処・処方・効能を念頭に置く必要がある。社会連携・社会貢献はその先に見えてくるものと認識し、まずアピールすることが大切である。

2. 構築・公開の重要性

「イベントをただ打てばよい」というものではない。＜資源＞がなければそもそもアピールはできない。生産される記録資料を不断に集積・編成・公開していく体制を整えていく必要がある。

質問Q

130周年の経費はどれくらいでしたか？センターの立案はどれくらいの%でしたか？イベントに対するマンパワーは？所属は？

回答A 明治大学創立130周年記念事業予算は、億円代の真ん中あたりで、阿久悠記念館は130周年事業予算をこえ、億円の真ん中くらいです。アイデアの主体はセンターがつくり、委員会にて審議する。概ね「やってね」と回答頂く。



* 写真は、明治大学HPより

II 全国大学史資料協議会 東日本部会 第82回研究会 (2012/12/13 東海大学湘南キャンパス)

「学びがいのある大学づくりと学園史・アーカイブスの役割」と題して、立教大学院本部調査役、東京大学・桜美林大学名誉教授、寺崎昌男氏の講演を拝聴でき、自校教育、アーカイブスの役割と大切さを実感することができた。大変有意義であり、教えて頂いた内容を共有できればと思い、頂いたコメントを下記にまとめる。

「学びがいのある大学づくりと学園史・アーカイブスの役割」

立教大学本部調査役
東京大学・桜美林大学名誉教授
寺崎 昌男 氏

- ・大学ぐらい産業界、社会から悪く言われたり、役に立っていないと言われることはない。
- ・東京大学でさえ、がんばっていても世界ランク20位程度である。
- ・中教審から「学生の自主時間を協力するようにしろ」といわれる。
- ・近代日本では、大学は正当性を保証するのがカギである。
- ・どのような沿革をつくるのか、アーカイブスをつくるのか、がカギである。
- ・大学沿革史の研究は、かつてはもの好きの仕事であったが、今では浸透している。
- ・大学の設立は、東京大学が昭和7年、京都大学が昭和13年である。
- ・沿革史は、今までは内部組織の変化に重点がおかれていたが、これからは卒業生、スタッフの学問業績、卒業生はどういう企業に何万人いてどんな内容の仕事についているかなどをまとめることが大切である。どの企業に就職し、どんな内容の仕事に就いていたか、どういう働きをしたか等。
- ・入学生はどこから受け入れたか、は重要である。立教大学は関東圏出身者が多い。いつから関東圏の大学になったのか、今後はどうなるのか。
- ・東京大学のように全国から集まる大学もある。



- ・立教大学には過去の入試問題が残っていない。
- ・勤務の長い研究者の研究室にいくと、入試問題が残っていることがある。
- ・入試問題をみると、問題作成スタッフの特徴がわかる。英語の問題では、会話問題でなく哲学的な英文を解釈せよ、との問題であった。当時、立教大学では教員のなかにネイティブ教員が半数おり、学内に住んでいた。彼らが哲学的な問題を出した。また、別の特徴として漢文の問題もかなりレベルが高かった。
- ・教員の業績は、今のように整備されていなかった。東北大学では、教員のなかに業績は個人の問題であるので、大学からの要請に応じないと言っていた。
- ・これからは教員の業績は重要である。
- ・これからは、揺るがない大学と大いに慌てる大学に二分化される。
- ・創業者に揺るぎないカリスマな人がいる大学、バイブル、佛教典等、価値のある厳選された成果を生んできた。
- ・一番揺らぐのは、理念のない国立大学である。
- ・東京大学に理念はありますか？国立大学は国策で設立した。歴代の東大総長が受け継いできたのは、理念ではなく、大学全般のことである。
- ・今では拡大の一時期を終え、大学の中身の検討が求められている。
- ・自校教育は世論も味方になっており、朝日新聞等マスコミでも取り上げられている。
- ・この大学の学生だという帰属感を作ること＝自校教育が大切である。
- ・「たまたまその大学に属したのなら、徹底的にそ

の大学を利用してやろう」といった学生を育て、元気づけることが大切である。

- ・「あ話を聞いたので、大学院に残って勉強する気になった。」というのもよい事例である。
- ・学生の帰属感、躍動的なものがどう捉えられることになるかは、教育政策であり、ある意味怖いものである。
- ・自校教育は、恥も外聞も話さなければいけない。セクハラもディスクロズしなくてはならない。
- ・それら歴史を話すことで学生は変わっていく。
- ・最近刊行された本『アーカイブスのつくり方』という本があり、東日本震災後10数名が集まって書かれ、「世間一般の人々への情報の整理＝アーカイブス」とまとめられている。
- ・アーカイブスは情報のプラットフォーム、検索が重要であり、アーカイブスをメディア論としたらどうだろう。
- ・学園のプラットフォームは何か？お客さんの導線と一致したプラットフォームづくりが大切となろう。
- ・大学構内に誰も近寄らない「通連金庫」がある。そこに立ち寄りると原点に帰った気持ちになれる。
- ・ヨーロッパが生んだ遺産＝財産目録。中世から近代にできた。
- ・ドイツの大学には、全学生の署名が保存されている。日本には慶応大学にしかない。
- ・アメリカの大学では、署名にコミュニティーへの貢献を付け加えた。
- ・アーカイブスは、アメリカの短大の90%がもっており、サンフランシスコの小さなコミュニティーカレッジにもある。
- ・雇用形態が変わり、教職員に嘱託職員、派遣職員、期間限定職員、など異なった雇用形態ができ、そして人事異動がありと、人が定着できなくなっている。
- ・深刻なことに、教員でさえも3年経つといなくなるケースもある。
- ・「プロジェクトのあるうちは変更しない」といった不動しない組織づくりが大切である。
- ・ウェールズリーという女子大の元学長は、1946年に日本へ派遣された教育使節団の一人であった。彼の当時の資料はすべて寄付されており、なか

には、電話の横にあったメモさえも渡している。メモした文字が残っており、それを守っているアーカイビストもまたプライドをもっている。

- ・そのアーカイビストに「この仕事を続けますか？他大学に移る気はありますか？」と聞いたところ、「今の大学で永遠に続ける、頑張る」と答えられた。
- ・アーカイブスは重要である。
- ・学生は一同に帰属感を持ちたがっている。良い大学こそ期待値が高い。

「大学研究者の履歴書/寺崎 昌男」(広島大学高等教育研究センター)より抜粋

教育史の研究室で育った筆者の立場からすれば、「大学史」研究ではなく「高等教育史」研究を選んでしかるべきだったかもしれない。この二つの領域は、天野郁夫氏がかつて鮮やかに整理されたように(『大学史研究』1992)、テーマの立て方と方法の面で大いに異なる。だが私は、かつて今も、大学史に関心を持ちつづけてきた。今さら変えられない。

現在(およびそう長くないであろう将来)に関して言うと、現在自分がすべき役割は、「大学アーカイブスをつくりたい」と考えておられる大学にはお手伝いをし、「まともな沿革史をつくろう」と志しておられる大学や学園には講演や示唆を惜しまない、という活動である。

若いころは史料を求めて這いずりまわらざるを得なかった。だが40年後の現在、研究条件は比べようもなく改善されている。大学アーカイブスの普及はその象徴である。それをさらに加速させ、大学史研究の障害、さらには大学改革への障害となるものを打破する作業に参加したい。大学アーカイブスの建設は、大学改革の重要課題たる「大学アイデンティティーの確認と共有」のための、何よりの拠点になる。

<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/html/~rireki-terasaki.html>